

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520202

研究課題名（和文） 第二次ボーア戦争前後の南アフリカ英語文学における「国家」「国民」そして「読者」

研究課題名（英文） "Nation" and "Readers" in South African Literature in English around the Time of the Anglo-Boer War

研究代表者

溝口 昭子（MIZOGUCHI AKIKO）

東京女子大学・文理学部・准教授

研究者番号：00296203

研究成果の概要：

1890-1910年という第二次ボーア戦争の前後（南アが植民地からアパルトヘイト国家に移行する時期）に書かれた英語文学研究。19世紀の Cape Liberalism の思想的影響を考慮しつつ、テキストが表象する多様な「国家」「国民 identity」の特徴を考察し、その形成に寄与した活字出版、戦争メディアそして読者の役割も明らかにした。その際南アの白人女性作家 Olive Schreiner の著作を基軸とし、アフリカ人知識人 Sol Plaatje 等を分析した。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2005年度 | 700,000 | 0 | 700,000 |
| 2006年度 | 500,000 | 0 | 500,000 |
| 2007年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,200,000 | 300,000 | 2,500,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アフリカ ボーア戦争 英語文学 女性 帝国主義 想像の共同体 読者 国民

1. 研究開始当初の背景

第二次ボーア戦争については Thomas Pakenham の *The Scramble for Africa*, そして Ian R. Smith の *The Origins of The South African War* 等を通して基本的な知識を得ている。また第二次ボーア戦争の時期に、アフリカーナー擁護、反帝国主義の運動を行った南アの女性作家 Olive Schreiner の研究をそれまで行ってきた。それ故、第二次ボーア戦争の時代における、南ア内外の帝国主義

および人種主義、国際資本家による経済搾取や政治操作への複雑かつ多様な言説や、英語作家達の言説やその読者層等についての基本的な理解はしていた。

また、Carolyn Burdett の *Olive Schreiner and the Progress of Feminism: Evolution, Gender, Empire* (2001) および Karel Schoeman による *Only an Anguish to Live Here: Olive Schreiner and the Anglo-Boer War 1899-1902* (1992)からは、帝国主義にまつわる当時の思潮のなかでの Schreiner の位

置について基本的な部分は理解していた。

あらたな視点を提供してくれたのは Donal Lowry 編著の *The South African War Reappraised* (2000) および特に Paula M. Krebs の *Gender, Race, and the Writing of Empire: Public Discourse and the Boer War* (1999) 等である。これらの研究書からは、戦時中にジャーナリズムが果たした役割、そして戦時中のアフリカ人の立場と彼らの視点についての知識を得ることができた。ただし、それを多様な国民 identity 形成につなげる形での研究は存在しておらず、そこに研究の意義があった。

2. 研究の目的

南アフリカにおいて第二次ボア戦争 (1899-1902) をはさんだ 1890-1910 年という時期に、様々な「国家」「国民」の意識が急速に形成され、多様な言説の中で国家としての南アが論じられ、表象された。この研究ではこの時代出版された南アフリカの英語作家 (Douglas Blackburn や Sol Plaatje など) を扱うが、その際、自らを “English-South African” とみなした白人女性作家 Olive Schreiner の作品を機軸とする) の作品が表象する「国家」「国民」の特徴を明らかにし、その形成に寄与した南アおよび英国読者の役割について考察する。最終的に、英語文学が、アフリカ人が圧倒的に多数を占める「多民族・多言語の植民地」からアパルトヘイトを土台にして「白人国家」への移行に関わり、また、どのように矛盾に満ちて複雑な national identities を生み出したかを明らかにすることがこの研究の目的であった。

3. 研究の方法

資料・情報収集

当該研究が対象とする時代 (1890-1910) における南アフリカの歴史、また、第二次ボア戦争における数々の言説およびそれに対する批評方法について情報を収集した。国内で入手できる関連資料は少ないので、インターネットで図書 (購入には主に amazon.com および exclusivebooks.com を使用) および論文 (主に論文検索ツール Proquest を使用) を購入。それら資料を時間をかけて読み込み、その中で当初想定していた英語作家以外で研究するに値する作家を発見した場合は、その作家を当該研究に含めることも検討した。また、自分のテーマに関係のある学会 (日本英文学会、黒人研究会、多民族研究学会、日本アフリカ学会等) に積極的に参加し、他の

研究者と交流を深め、情報交換をした。

口頭発表・論文発表

まず、既にある程度考察がなされている Schreiner の未完の小説 *From Man to Man* (1926) (死後出版) について論文を完成させ、中編 *Trooper Peter Halket of Mashonaland* (1897)、随筆 *Thoughts on South Africa*、短編 “Eighteen-Ninety-Nine” (1923) (同じく死後出版) について、新しく得た、批評理論および当時の歴史的背景や第二次ボア戦争をめぐる様々な言説に関する知識を用いて再考察を試みた。また、Schreiner 以前に、どのように英国読者が南アをめぐる言説形成に寄与したかを把握するために David Livingstone の探検記も研究した。そして、Plaatje の著作という新しい分野を Schreiner を基軸として同様の手法を用いながら研究した。その結果を国内の研究会などで発表し、他の研究者と意見交換を行った。そのフィードバックを生かし、英語論文作成を始め、完成した時点で必ず native speaker の英語論文添削をうけ、大体、年に一本のペースで論文を発表した。

4. 研究成果

発表した主な論文をテーマ別に分類しつつ、研究成果を述べる。

(1) 1890 年以前の探検家によるアフリカ表象と英国読者との関連

Schreiner 以前の南アを巡る英語テキストの帝国主義言説を特徴づけていた英国の読者の存在を理解すべく、Schreiner 以前の時代に、南部アフリカを訪れた探検家や植民者が英国本国の読者向けにアフリカを表象する際に、どのように英国読者用に「植民可能な土地」として書き換えたかについて研究した。例えば論文 “Not So Much of What Has Been Done, As of What Still Remains to Be Performed” においては、David Livingstone の探検記 (Olive Schreiner も幼少期に読んで育っている) に焦点を当て、彼が時には情報を捏造してまで、南部アフリカの土地とその住民をテキスト上で「分離」し、土地は「英国人が植民可能な土地」、住民は「改宗・教化可能で英国人の農地の労働力に変換可能な」存在として書き換えたそのプロセスについて考察した。

(2) Olive Schreiner のボア戦争前後の著作における読者と国民 identity との関連

Schreiner のボア戦争前後の著作について、彼女の南アフリカ人としての identity の

形成を彼女が意識していた読者の問題を含めて論じた。

論文“Politics of Gender, Race and South African Space”では、彼女が未完の小説 *From Man to Man* において、南アの読者を強く意識したことが、南アで当時議論されていた Black Peril あるいは White Peril (異人種間のレイプ) の問題の極めて南アフリカ的な捉え方 (作品で示された解決策は、良心的ではあるが隔離体制容認につながる言説を含む) につながったことを明らかにした。そしてその主題の扱い方が後の南アフリカ女性作家の同様の主題へのアプローチに共通していることも示された。

論文“Africa Emptied”においては、Schreiner が帝国主義の正統性を崩す際に、19 世紀末の Cecil Rhodes による南部アフリカ侵略の実態を *Trooper Peter Halket of Mashonaland* という小説によって暴く手法を明らかにした。その際に、反帝国主義 / 反資本主義 (南アの英国系白人には珍しい) を貫く彼女が英国の少数派の「理解ある読者」に Cecil Rhodes の南部アフリカ侵略について訴えるためにとった文学的戦略を考察した。この考察によって、彼女の反帝国主義 / 反資本主義的主張が、英国の少数のリベラルな読者の存在に依存していたことを明らかにした。Schreiner の反帝国主義 / 反資本主義は、第二次ボーア戦争中に、当時南アの英国系白人の間では少数派であったアフリカーナ擁護派であった彼女の思想的基盤でもあるため、極めて有益な研究であった。また、この論文では、その彼女の思想と、ボーア戦争以前に行われていた大英帝国の南アの同化政策 Cape Liberalism への回帰願望との関連も明らかにされた。

(3) Cape Liberalism と Olive Schreiner および Sol Plaatje との関連

2007 年 12 月に行った研究会発表で、「ボーア戦争を巡る表象 : Olive Schreiner と Sol Plaatje を中心に」という題目で発表を行った。Cape Liberalism を理想とする「リベラルな白人」Schreiner とアフリカ人知識人 Plaatje が、それぞれボーア人派と大英帝国派という反対の立場を取った背景を明らかにし、彼らが対象としていた読者層の違いから来る言説の差異を考察した。この口頭発表の一部を発展させ、論文 *Representing the "Other" to "Home" and English South African Self-fashioning in Olive Schreiner's "Eighteen-Ninety-Nine"* を完成させた。この論文では、第二次ボーア戦争勃発後に「故郷」の英国のジャーナリズムを利用し、英国の「少数の理解ある読者」に向かって自分とその生まれ育った国の「他者」(ここではアフ

リカーナ) を擁護する中で形成される (あるいは演じられる) 「英国系南ア人」としての自己のあり方を考察した。また、彼女の反帝国主義を Conan Doyle らの提唱する帝国主義とも対比することで、彼女の一見混乱しているように見える反帝国主義 (アフリカ人も、アパルトヘイト的政策を推進するアフリカーナも、同じように英帝国主義の犠牲者として擁護する) を解明した。

彼女の反帝国主義/反資本主義は、当時の農本主義や Darwinism に影響されたものであった。故にボーア人を「英国人の状態に進化可能な農民」とみなし続け、一方で急速に産業化する南アにおける非白人の苦悩は語れても、非白人の農業労働者や家庭内の黒人召使などあまり問題視しなかったのである。

(4) Sol Plaatje の第二次ボーア戦争時代の著作における Cape Liberalism、戦争ジャーナリズムそして帝国臣民意識の存在

論文“Imagining the Empire under Siege”において、大英帝国の同化政策 Cape Liberalism (一定の教育と収入がある成人男性に投票権や土地所有権を与えるという同化政策) を理想とするアフリカ人知識人 Plaatje が第二次ボーア戦争中に大英帝国への帰属意識をさらに強めた過程を、彼が戦時中および戦後に書いた日記、エッセイや手紙を用いて考察した。その際に Benedict Anderson の *Imagined Communities* をその理論的枠組みとして用い、英語の識字、活字資本と読者の存在が植民地の教育を受けた被支配者層に大英帝国への帰属意識を植えつける過程について特に注目して論じた。

さらに、Plaatje の戦時中の日記 *Mafeking Diary* が「読者を想定していた」ことに注目し、論文“Writing a Diary under Siege”において、戦時中にアフリカーナに包囲されていた南アの英国系の町 Mafeking で人々がつけていた日記が「歴史の記録」として意識的に書かれていたこと、また、裁判所の通訳 / 英国軍とアフリカ人部隊との連絡役 / 特派員の助手であった Plaatje の日記に記された情報が彼の書く軍への報告書や特派員の新聞記事にも使用されていたという特殊な状況下で、本来私的な日記執筆が戦争ジャーナリズムを通してどのように彼の大英帝国との絆を強固にし、彼の帝国臣民としての identity 形成と関わったかについて Benedict Anderson を用いながら論じた。

(5) 結論

この研究は、南アをめぐる英語文学が、アフリカ人が圧倒的に多数を占める「多民族・多

言語の植民地」からアパルトヘイトを土台にして「白人国家」への移行に関わり、また、どのように矛盾に満ちて複雑な national identities を生み出したかを解明するのがこの研究の目的であった。

研究の中で、Olive Schreiner に関しては、彼女が「英国の少数のリベラルな読者」に訴えることで「植民地における帝国主義政策の悪を正す」中で形成された「英国系南アフリカ人」としての identity および南アフリカ観がその後の著作にも影響しており、彼女の「南アフリカ人」としての後の identity 形成につながるものであることが確認された。また、彼女の著作にある反帝国主義 / 反資本主義という複雑な ideology を解明するなかで、当時の戦争ジャーナリズムが南ア人の identity 形成に果たした役割も明らかにされた。

しかし、一方として予想外の発見もあった。アフリカ人知識人が自らを「英帝国臣民」として捉えていたこと（植民地政府よりもイギリス本国を信用するという温度差はあったが）、そしてその基盤として Cape Liberalism が非常に大きな役割を果たしていたということである。また、彼らが「帝国のもとでの平等」(Cape Liberalism を押し進めた結果による)を信じ、それを語る際に、英語の識字、新聞を含む出版物、読者が果たした役割は Benedict Anderson が「国民国家」の成立を支えるとみなしている要素と酷似していることを発見した。つまり、世界にまたがる「英帝国」が「国民国家」として南アのアフリカ人知識人の心の中で存在していたことが明らかになった。これは「英国」および「南アフリカ」のみを「国家」として捉えていた自分の前提を覆すものであった。

また、Plaatje 研究を通してあらためて、戦争中における情報伝達の量や早さの躍進や、戦争プロパガンダが、個人に敵 / 他者を認識させることで、帝国の中での自分の nation(国民)としての位置を確認させたことを確認した。

(6)国内外における位置づけとインパクト

Schreiner の “Eighteen-Ninety-Nine” を彼女の政治的立場を解明しつつ、第二次ボア戦争を巡る思潮から包括的に詳細に論じた論文は国内外では見当たらない。その意味で(3)の研究の国内外のインパクトは大きい。

Benedict Anderson の *Imagined Communities* は、英国の植民地教育と活字資本を経験した被支配者層と、その帝国臣民意識の関係が国民国家形成の前段階であることには触れているが、南アのケース、ましてや第二次ボア戦争時代の状況につ

いては全く論じてはいない。故に、Sol Plaatje と Anderson を関連させた「想像の共同体研究」は全く新しい領域と言ってよい。

(7)今後の展望

自分の論文に活かしきれなかった、多くの資料（例えば Douglas Blackburn の著作）をさらなる論文作成に活かすことでさらに複眼的な視点を持つ研究につながる。

南アフリカでどのような形で「想像の共同体」が発生していたのか、当時の出版やジャーナリズムに関してさらに詳細に研究を重ねながら、南部アフリカ地域の case study としてのスケールの大きい「想像の共同体研究」（その共同体が帝国から南アフリカにどのように移行するかも含めて）が可能な領域である。

第二次ボア戦争以降にアフリカーナと英国人が手を結びアパルトヘイト国家への道を進んだことは Schreiner や Plaatje を失望させ、特に Plaatje に関しては彼が帝国臣民であることの限界を認識させ、北アメリカで W.E.B Du Bois や Marcus Garvey などと交流し、後の Pan-Africanism につながってゆく。この新たな「想像の共同体」への移行に関する研究の可能性も開拓しうる。

この時代は情報だけでなく、英国本国や植民地の人々が、戦争や植民のために移動を繰り返していた。この「移動」が「想像の共同体」構築に果たした役割を探ることも研究可能な領域である。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

「Mizoguchi, Akiko. “Writing a Diary under Siege: Imagining the Empire in Sol Plaatje’s *Mafeking Diary*” 『津田塾大学 言語文化研究所報』 24 (2009): 23-32. (7 月刊行予定)(査読なし)

「Mizoguchi, Akiko. “Imagining the Empire under Siege: Sol Plaatje’s Writing on the Time during the Anglo-Boer War.” *Essays and Studies* 55 (2009): 19-33.(査読なし)

「Mizoguchi, Akiko. “Representing the “Other” to “Home” and English South African Self-fashioning in Olive Schreiner’s ‘Eighteen-Ninety-Nine.’” *Essays and Studies* 54 (2008): 19-33. (査

読なし)

Mizoguchi, Akiko. "Politics of Gender, Race and South African Space: Rereading Olive Mizoguchi, Akiko Schreiner's *From Man to Man* from a South African Perspective." 『東京女子大学比較文化研究所紀要』 69 (2008): 33-46. (査読あり)

Mizoguchi, Akiko. "Not So Much of What Has Been Done, As of What Still Remains to Be Performed: 'Emptiness' in David Livingstone's *Missionary Travels and Researches in South Africa*." *Essays and Studies* 53 (2007): 75-98.(査読なし)

Mizoguchi, Akiko. "Africa Emptied: An English South African Representation of the "Other" Land in Olive Schreiner's *Trooper Peter Halket of Mashonaland*." *Essays and Studies* 52 (2006): 37-54. (査読なし)

(3)連携研究者
なし

〔学会発表〕(計1件)

溝口昭子「ボーア戦争を巡る表象：Olive Schreiner と Sol Plaatje を中心に」黒人研究会 12 月例会. 2007 年 12 月 8 日(京都キャンパスプラザ於).

〔図書〕(計1件)

『英語文学事典』(共著)木下卓/窪田憲子/高田賢一/野田研一/久守和子編著(執筆者以下 110 名 内 100 番目).ミネルヴァ書房, 2007 : 32-33, 265-266,539,546,659

〔その他〕

溝口昭子「アパルトヘイト終焉後の南アフリカ文学史」『英語青年』152.3(2006):31-32.

溝口昭子「彷徨える帝国の娘」『英語青年』152.9(2006):36.

6. 研究組織

(1)研究代表者

溝口 昭子 (MIZOGUCHI AKIKO)
東京女子大学・文理学部・准教授
研究者番号：00296203

(2)研究分担者

なし